

---

# MIRROR

wan

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MIRROR

### 【Zマーク】

Z8536F

### 【作者名】

wan

### 【あらすじ】

強大な軍事力を誇る大国、カーティス。水の都、リュートで生まれた反乱組織「レジスタンス」。強大な力に屈することなく、必死に生き抜く「レジスタンス」のメンバーと、復讐のために生きる人の青年の「戦い」の物語。

FILEO・ログ

ザシュツツ！

ひ、ひるむな！撃てえ！！

ズガガガガガ！！

十字紋開放、『孤月』！

ぐあああああああ！－！－！

「JRのあたりにあるか・・・」

季節は冬。

一面の雪に包まれた白一色の世界。

そこに紅い一つの光がぼんやりとただよつてゐる。

「今日は寒くなりそうだ・・・」

ベッドもシャワーも食べるるものもない。あるのは防寒用のマントだけ。

常人なら数十分で凍死してしまつような状況だ。

シャロンはマントで体をくるむと、比較的大きな木の下に体をよこしたえた。  
吹雪がおさまるまでの辛抱だ、彼はそつ白らに言い聞かせて瞳を閉じた。

あたりは再び白一色となつた。

## FILE 1・レジスタンス

「くそつ、じこつちり……」

「ジン！だいじょうぶ！？」

「ああ、かすり傷だ！それより港の方が心配だぜ！」

「そうね・・・でもリドがついてるからきっと大丈夫よ。私たちは私たちのできることをやりましょう！」

「そうだな・・・その通りだ・・・」じこつちりにリユートを好き勝手にさせねえ！」

ローレル大陸一の水の都リユートは、軍事大国カーテイスの武力に屈しない、大陸で唯一の自治国家である。

本来リユートは豊富な海産資源による貿易から栄えた街であり、軍事力は皆無に等しかつたが、隣国が次々とカーテイスに落とされしていく状況に対し、カーテイスの侵略に立ち向かうべく反乱組織『レジスタンス』を結成。

元軍人から一般市民、はては浮浪者から犯罪者まで、寄せ集めからのスタートだったものの、リーダーのリドを中心とした統率のとれた指揮系統、徹底的な戦闘訓練を経て屈強な戦闘集団に成長したレジスタンスの活躍により、リユートはこれまで幾度ものカーテイスの攻撃に耐え凌いできた。

しかし近年のカーテイスの軍事力の成長はすさまじく、度重なる武力攻撃により疲弊したリユートの陥落はもはや時間の問題だった。

しかも今回は、ティンバー大陸の大國、ヴェスターを三日で制圧したといわれる『カーテイスの盾』第1師団の攻撃だった。

「動けるものは武器を取れ！一歩も退くな！退いた者は、この俺が斬る！！」

身の丈もありそうなほどの大斧を振りかざしながらリードは味方を鼓舞する。

「隊長！これ以上はもちこたえられません！数が多くます！」

「馬鹿野郎！そんな口叩くヒマがあつたら、一人でも多く敵を叩つ斬れ！」

リードが斧を横に薙ぎ払つと同時に、カーテイス兵の胴体が真つ二つになる。

雪化粧をした地に、鮮やかな鮮血がそそがれる。

「俺たちがあきらめたら、リュートは終わりだ！シティはジンとミーナがもちこたえてる！だから、ここは俺たちが死んでも守りきるんだよ！…」

「隊長・・・・」

「あきらめるな・・・俺たちの、リュートの魂見せてやれ！…」

リードは飛んで来た火矢を斧を盾にして防ぐと、おびただしい数の力一テイス兵の中に突進していった。

「ぐあっ！」

ジンの正拳突きを受けたカーティス兵がうめき声を上げてその場に崩れ落ちる。

「くそつー！キリがねえよー。あとどんくらいだー？」

「わからない・・・でも、相手はまだまだ退くつもりがないことだけは確かよ！」

ミーナは正面の敵を鋼鉄の槍で突き飛ばし、すらりと伸びた長い脚で後方の敵に鋭い蹴りを浴びせる。

ジンとミーナの二人の戦闘能力は、レジスタンスの中でも高い力を誇る。

近距離の格闘戦を得意とするジンは主に戦線の特攻部隊を、槍による中距離戦を開拓するミーナは後方支援を担当することが多い。腕力と天性の格闘センスに物を言わせ、相手に反撃する隙を与えない怒濤のラッシュで一気に攻め立てるジンに対して、腕力はないが、的確に急所を突く全身のバネをつかつた蹴りと、見る者を魅了する槍さばきで、まるで踊っているかのような華麗な攻撃をみせるミーナ。

戦闘スタイルは両極端だが、二人ともリーダーのリードも一目置く、レジスタンスの若武者だ。

(たしかにこのままじゃキリがないわ・・・相手の指揮官を叩かなくや・・・！)

ミーナはカーティス兵の銃撃を横つ飛びでかわしつつ、冷静に戦況を分析する。

そのとき、前方で燃えさかる炎が、まるで意思をもったかのようになんと膨れ上がりしていくのが見えた。

「あ、あれは……ジン！ あぶない！ ！」

「あん？ ……ひつひつおつ……！」

巨大な炎がジンを襲う。

「あ、あつぶねえ……なんだ今……！」

寸前のところでなんとか炎をかわしたジンだったが、突然の正体不明の攻撃に動搖を隠し切れない。

「『マージ』……魔法よ……！」

「マージ？ 魔法って、なんだよそりや！ ？」  
ジンが体勢を立て直しながら目を丸くしている。

「へえ、マージの存在を知るヤツがこんなところにいるなんてなあ……」  
・・・

ゾクッ

ミーナは全身の身の毛がよだつような感覚に襲われた。

狂氣 殺戮 冷酷

そんな負の感情を凝縮したような、ヒトの感情を忘れたような声

「わい・・・

死ぬことを恐れない戦乙女に、恐怖といつ感情が芽生えた。

「朝・・・か。」

シャロンはあまりの寒さに目をさました。

「この寒さでよく死ななかつたものだ、と自分の頑丈さに关心してしまひ。

どうやら昨夜までの吹雪はおさまつたようだ。  
しんしんと音もなく静かに雪がふつてゐる。

「凍死しなかつたのは良かつたとして・・・」のまじや今度は餓死だな・・・」

もう三日以上食べ物も飲み物も口にしていない。

いぐり自分の体が頑丈でも、そろそろ限界が近いことは明白だつた。

・・・

「ん・・・？今のは、人の声・・・？」

一瞬、それにかすかにだが、確かに人の声が聞こえた気がした。

「・・・行つてみるか。」

シャロンは覆っていたマントを腰に携えると、深く積もった雪を掻き分けるよつにして歩き出した。

「て、てめえ！何モンだーー？」

ジンが身を構えながら啖呵をきつた。

「おーおー、威勢がいいねえ。そういうバカキャラ、オレ好きだぜえ。へへ。」

男はうつすら笑みを浮かべながらジンを挑発する。

「ざつけんなー！ジだかマージだか知らねえがぶつとぼしてやるー！」

ジンは強く地面を蹴ると、一気に駆との距離を詰めて渾身の力で男に拳を繰り出す。

「ジンーーーだめえーー相手はマージ使えるのよーー！」

「やれやれ。無知っていうのはコワイねえ・・・いや、それとも口のバカかな？バカは死ななきや治らないつてか・・・！」

眩い光が男の右手の五指に灯る。

それはやがてほどぼしる炎へと変化した。

ズガツツー！

「ぐはつっーーーー！」

宙へと体が投げ出され、ジンは激しく地に身を打った。

「ジンーーーー！」

ミーナがあわててジンのもとへ駆け寄る。

「！」これは・・・・・・

ジンの服は炎で焼き尽くされ、胸には五本の爪痕がくつきりと残されていた。

どうやら男は指先に炎のマージを宿らせて、打撃時にそれを爆発させたらしい。

「ジンーーーっかりしてーーーー！」

「う・・・・あ・・・・」

ミーナはジンに必死に呼びかけるが、ジンの意識は既に朦朧としており、爪痕からおびただしい量の血が流れている。このままだと危ない。

「ジンーーーー！」

「あーーーーーーーー男には容赦しないタイプとはいえ、ひょっとムキ

になりすぎちまつたかな。ま、いつか。どう立ちあがめ殺しだし。へ  
へ・・・。」「

男は相変わらずへらへらとした笑みを浮かべたまま、ゆっくつとリーナに近づいていく。

「...うつへゆる」

ミーナは槍を手に男へと飛びかかる。

（私は死を恐れぬレジスタンスの戦士！）わくなんて・・・（わく  
なんてない・・・！）

ブンツ！

「おつと・・・！かわいい顔してねくせにあぶねえ姉ちゃんだな才

ミーナの横払いをあつさりとかわした男はやれやれといった表情をみせた。

「だけど、いうう氣丈なオソナを恐怖の底に突き落とすつてのもたまんねえんだよなあ・・・へへへ・・・」

「まだまだっ！」

ミーナは高速で連続の突きを繰り出す。

空気を切り裂くような突き。

並みの敵なら一瞬でバラバラになつてゐるであつた。

しかし槍の先に男はいなかつた。

あるいは突きの衝撃波で粉々になつたラム酒の樽の残骸だ。

「うちだよ、お嬢ちゃん……！」

二つの間にか背後へと回り込んでいた男の腕が、ミーナの細く、雪のように白いうなじへと迫る。

「はあっ……」

しかしミーナは振り向きながら左肘で男の腕を強く払い、腰を深く落とした。

「奥義、『流槍尖』！」

ミーナは槍先で男の体を突き上げると同時に高く跳躍し、空中で一回転した勢いのまま男に槍を振り下ろした。

下からの突き上げと跳躍の力を利用した空中からの一段攻撃。厳しい鍛錬を経て会得した、ミーナの必殺技だ。

「やつた……！？」

「やつてないぜ、お嬢ちゃん……！」

「なつ……ああつ……」

男の右腕に首を掴まれ、凄い力で締め上げられる。

「び、びりして……決まった……はず、なのに……」

『『Hアロバリア』。風の力を利用して空気の壁を作り出す、防御マージや。まあ使い手のレベルでその効力は変わってくるがな。知らなかつたかな、お嬢ちゃん。へへ。』

男はミーナの首を締め上げる腕に力を込め、ミーナの体を軽々と宙へと持ち上げた。

(「ひひひ……なんとかしなきや……！でも、体が、体が動かな  
い……！」)

「いいぜえ、その恐怖に引きついた顔……たまんねえなあ……」

男は左腕で乱暴に彼女の服を掴み、一気に引きちぎった。

ミーナの上半身があらわになる。

「あやあや……」

ミーナは突然の男の行動に悲鳴をあげる。

そして男はそのまま地面にミーナを叩き付けた。

「あつづ…ゲホッ…ゲホッ…！」

背中に強い痛みが走るとともに、締め上げられていた腕から開放され、酸素を求める肺が収縮する。

呼吸が落ち着くとすぐに、ミーナはそりけ出されたおおきな乳房を隠そうと必死に両腕で胸を覆う。

「おおっ、思った以上にデカパイだなオイ！」じゅわそられるぜえ・・・！」

「や、やめて・・・！」

ミーナの瞳には大きな涙が溢れていた。勇敢な戦乙女が、今は只の一人の少女でしかなかつた。

こわい

恐怖という感情が、再び彼女の心を包み込んだ。

「へへ・・・オイおまえら！オレは『』のオンナとちょいと遊んでるからよ、その間にこの街つぶしどけ。」

男はミーナに馬乗りの格好になると、背後のカーティス兵たちに平然と言い放つた。

「さあ、たつぱりと可愛がつてやるぜ、お嬢ちゃんよ・・・！」

「や、やめてえ！お願い！」

ズシャツ！

「あ、貴様何者だー？ぐええつーー。」

アーッシーー。

「うがあつーー。」

「エ、エマ様！！な、何者かがこちちら……！」

「あんだあ・・・？人がこれから楽しもうつて時に・・・」

「そいつは邪魔したな。」

深紅の瞳が、一面の雪景色に浮かび上がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8536f/>

---

MIRROR

2010年10月10日12時55分発行